



阿部公彦

先日、少々後味の悪い騒動がありました。事の発端は、百田尚樹さんの「日本国紀」(幻冬舎)に対する津原泰水さんの批判。ネット上の匿名の記述からの引用が多いといった指摘でした。幻冬舎はこれを巡るやりとりをへて、津原さんの作品の在庫化を中止。この経緯を津原さんが公にすると、今度は社長の見城徹さんがその刊行物の実売部数をツイッターで晒し、「売れない作家のくせに」とばかりに非難の言葉を投げつけたのです。

▼「賭け」

この「晒し」には著述家から批判が殺到します。発行部数と違い、実売部数は通常は秘密。それをわざわざ晒すのは悪意ではない。モラルに反する。結局、見城さんは「謝罪」し、メディアでの活動を自粛します。

後味が悪いというのは、この事件を通して出版業界の「現実」がクローズアップされたからです。「いい本は売れる」と考える人もいるでしょうが、むしろ「売れる本がいい本」と考える出版関係者は多い。その観点から値段、発行部数、宣伝費、営業活動などが設定され、それがまた売れ行きにも影響する。津原さんと見城さんのやりとりからは、そんな背景が透けて見え

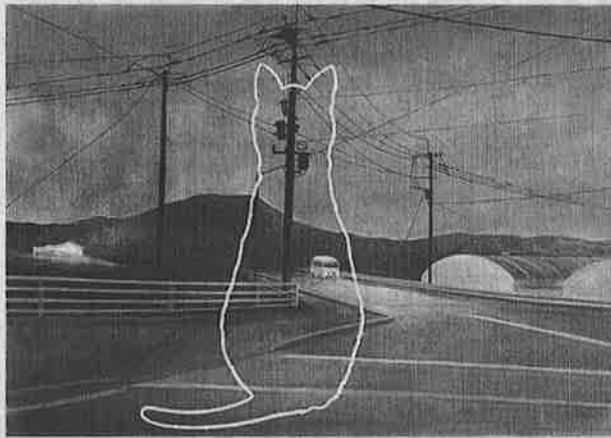
ました。

しかし、この「現実」は「虚」とセツトです。読者のことを考えてみましょう。本は中身を讀むまで価値がわからない。購入は「賭け」なのです。しかし、「賭け」のはずが実は(胴元ならぬ)版元の仕掛けに踊らされている。そんな構造が温存されるのは、購入された本の相当数が読まれずに終わるからでしょう。だから「買わせるまでが勝負」という商法が繰り返されても、大きな信用暴落にはつながらない。表に出るのは「〇万部突破!」といった威勢のいい数字

字だから。

▼「期待値」

ただ、本が期待値を背負った「虚」の商品であることを、簡単に批判することはできないとも私は思います。そもそも人の



絵・片山高志

心は、本性的に、期待値や樂觀性や妄信に支配されるもの。人は何よりも「信頼する動物」なのです。文学作品が微妙なのは、商品として期待値(ビジネスのた

だ中)にありつつ、作品内容としても期待値に踊らされる心の現実を扱うからです。たとえば「群像」(7月号)で特集された西村賢太さん。デビュー時から一貫して、藤沢清造というほとんど忘れられた作家への狂信的なほどの愛着を作業中で吐露してきました。日傭い労働をしながら、月命日にははるばる石川県の菩提寺へ供養に

「虚」扱(う)えとの意味

らえられているから。

▼「迫真性」

上田岳弘さんの「キュー」(新潮社)は芥川賞受賞後第1作。ちよっとお洒落でナルシストの心療内科医が、寝たきりの祖父を通して別世界に迷いこむ。そこでは全体主義的な「錐国」と民主的な「等国」とが対立し、憲法「九一条」がからむ。多くの近未来小説と同じく、ここでは未来が過去の鏡となり、豊穣な意味の場となります。

複数の時間の並走という手法は、著者が尊敬する村上春樹の作品群を連想させます。時間の切り替わる刹那には、軽く頬をはたかれたような小気味よさがある。自己陶酔型の主人公が現実をつきつけられては覚醒する、そんな陶酔と覚醒の繰り返しのリズムが作品全体の構成とも重なって感じられます。

訪れ、ついには隣に自身の生前墓まで建てる。作家として名声を得ると、念願かなって清造の作品集を刊行します。今回の「群像」でも、自作とならば清造の短編を掲載、解説を付しています。

高山羽根子さんの「如何様イカサマ」(「小説トリッパー」夏号)は、戦地から復員した後、に姿をくらました画家が、実は偽物だったのではないかと、という話。

何の「実」も伴わないこの愛。しかも西村さんは清造の作品を「これは、褒めるよりも貶した方がラクな類の小説」とも評します。将来も売れそうにない。文学史にも残りそうにない。まさに謎の愛です。無償の寄付のごとき偏愛。しかし、私たちの共感が働くのもそこなのです。理解不能のこだわりを書ききる小説は強い。しつかり「虚」の真相がと

戦争ものには地をほうようなリアリズムが期待されがちですが、この作品では画家のあやしさ(抽象論)を呼び込み、病人はみな似たような顔になる、とか、人は顔の違いに気づきやすいからお札のデザインには顔があるといった話題に。そこには寓話めいた浮遊感が漂います。足元の危うさが、まさに「虚」の迫真性につながる作品となっています。(英米文学者)

△随時掲載します▽